

前回に続きジャズチューンの名曲のパート2をお届けします。主にミュージカルのために書かれた歌曲の中でシンガーによって繰り返し歌われ、あるいはミュージシャンのアドリブ心を刺激する曲がインストジャズで演奏されるようになったものをスタンダード曲と呼ぶのに対し、最初からアドリブを展開するためにジャズミュージシャンによって書かれた曲をジャズチューンと呼びます。

#### ◎ハードバップ期—ジャズチューンの黄金時代—

前回のメルマガでは、スイング時代からビバップ期までの間に書かれたジャズチューンを紹介しました。今回は1950年代半ばから始まった、ハードバップ期にたくさん書かれたジャズチューンの名曲をご紹介します。

ハードバップとは、そもそもどういうジャズだったかの説明も必要でしょうね。「バップ」という言葉は共通しているので、「ハードなバップ」あるいは「バップ（ビバップ）をハードにしたもの」という意味合いを感じますが、実は逆の意味合いがあります。

コードの上で使える音を最大限に拡張し、非常に緊張感、スピード感のあるアドリブをとことん追求したバップは、ものすごい音楽的発展を遂げたものの、あまりにも先鋭的になりすぎて一般的なリスナーの耳から離れてしまったという事情は前回説明しました。こうした追求ではなく、バップ期に考え出された音使いを生かしながら、より分かりやすくメロディアスな方向に発展していったのがハードバップです。

テンポ的にもバップ期の猛スピード的なテンポは避けて、多くのリスナーが心地よく聴けるテンポ感で、コードについても1小節に幾つも入るような目まぐるしいチェンジはあまり使わなくなりました。「ハードなバップ」というと、ビバップをもっと先鋭的にしたジャズという語感がありますが、音楽的な方向はむしろ、ソフトとは言いませんがバップより聴きやすくなっているのです。

この「聴きやすさ」「分かりやすさ」を演出したのが、ジャズミュージシャンによるジャズチューンでした。一番の特長は、ミュージカルスタンダードとは別の意味で分かりやすく口ずさみやすいメロディです。ハードバップの中でも、「ファンキー」と呼ばれたテイストのジャズは、ブルースフィーリングに溢れた、土臭くしかし魅力的なメロディーの曲を生みました。

まずは、ファンキー・ジャズの代表的なバンドである、アート・ブレイキー(ds)とジャズ・メッセンジャーズが、ジャズとしては空前のヒットを飛ばした「モーニン(Moarnin')」を聴いていただきましょう。ほとんどの読者の方が懐かしいと思われるか、ああ、あれねと思い出すメロディでしょう。1958年の録音です。  
<https://www.youtube.com/watch?v=Cv9NSR-2DwM>

作曲したボビー・ティモンズ(p)が弾く単音メロディを、管のアンサンブルが「バーバツ」と追いかけるテーマの展開が。まさにハードバップの「分かりやすいカッコよさ」という特徴を表しています。ブルースっぽい土臭さもふんだんに持っている曲ですね。

1961年にメッセンジャーズの来日公演でもこの曲が演奏され、ジャズ評論家の故・油井正一氏が、「そば屋の出前持ちまでも、モーニンを口ずさんだ」と当時の様子を書いています。そのくらい日本でも親しまれたメロディです。アメリカで生まれた音楽であるジャズを日本人が最も楽しんだ時代とも言えるでしょう。

この曲は多くのジャズチューン同様、歌うための曲ではありませんでしたが、非常に人気が出たので、後にジョン・ヘンドリックスというヴォーカリストが、「Everybody knows I'm moarnin'」で始まる有名な歌詞をつけました。ヘンドリックスという人は、ボサノバのポルトガル語の歌詞を英語で作り直すということもやっていて、「Che Ga De Saudade」に、全く内容の違う「No More Blues」の歌詞をつけてしまうという頂けない仕事もあるのですが、モーニンについては成功していると言えるでしょう。

もう一つティモンズが書いたダット・デア(Dat Dere)という曲もメッセンジャーズの人気曲となりました。リズムックで覚えやすいメロディが印象的です。

[https://www.youtube.com/watch?v=\\_3vpiTgG59A](https://www.youtube.com/watch?v=_3vpiTgG59A)

◎分かりやすさから音楽的深みへ

これらの曲は、構造、コード進行がシンプルでメロディもリズム的に追いやすいのが特徴です。ブルース形式の曲でなくてもブルース的な音使いやフィーリングに溢れていて、誰が聴いても最初から入っていきやすい分かります。

こうしたファンキー初期の曲は、ある意味泥臭くて(英語ではdown to earthという言い方もあります)シンプル過ぎる感じもあり、音楽的な深みはあまりないとも言えます。コード進行も単純なため、アドリブの見せ所も少ないというきらいがありました。

ここで終わってはいませんが、ファンキーも発展しなかったと思いますが、音楽的に深みがあり、現在でも演奏される曲が書かれるようになりました。やはりメッセンジャーズのピアニストだったホレス・シルヴァーは良い曲を書いています。ソング・フォー・マイ・ファーザーなどシンプルで分かりやすい曲もありますが、セント・ヴァイタス・ダンス(St. Vitus Dance)というミュージシャン好みのカッコイイ曲があり、現在でもライブで演奏されることがあります。

<https://www.youtube.com/watch?v=jt2gRIJ8vME>

日本では大変人気のある(アメリカではほとんど知られていないそうです)ソニー・クラークのクール・ストラッティンというアルバムに収録されているDeep Nightという曲です。タイトル曲のブルースはファンキー色が濃いのですが、Deep Nightはマイナーの色合いをうまく生かしたモダンな好曲です。これもクラークの曲です。

<https://www.youtube.com/watch?v=3GKvPNEkNdw>

ハードバップ期はファンキー以外にも様々なミュージシャン、グループが生まれ、ジャズチューンも彼らのスタイルに応じた名曲がたくさん生まれました。自分がハードバップ期の最も優れたグループの一つだと思えるのが、クリフォード・ブラウン(tp)とマックス・ローチ(ds)の双頭コンビです。

このバンドはスタンダードに加えて彼らのオリジナル曲をたくさん吹き込みました。ブラウンが書いたジャズチューンの名曲で、現在でもよく演奏される、ジョイ・スプリングを聴いてください。

[https://www.youtube.com/watch?v=dnK60HPQZbA&list=RDdnK60HPQZbA&start\\_radio=1&t=0](https://www.youtube.com/watch?v=dnK60HPQZbA&list=RDdnK60HPQZbA&start_radio=1&t=0)

◎ブラウン・ローチ・カルテットが取り上げた名曲

曲調が、ティモンズやシルバーの曲とかなり違うのが分かると思います。ファンキーのような泥臭さはなく、端正なカッコよさがあります。実はコード進行もかなり複雑で、その意味ではバップチューンとの共通性があるのですが、バップのような極限の緊張感を目指しているのではなく、適度なリラクゼーションとスイング感があります。

そして、ブラウン(テナーのハロルド・ランドも中々良いです)のアドリブソロは、曲の持つコード進行を完璧に表現していて爽快です。自分は何度聴いても飽きません。ブラウンは2コーラスアドリブを吹いていますが、2分32秒から始まる2コーラス目の最初に、ブルーノート(b3)を使って変化をつけ、またコードに忠実な音使いに戻っていく変化の付け方も見事です。

このバンドがよく演奏し、代名詞ようになっていたジョー・ドゥー「JorDu」という曲も聴いてください。これは同時代のピアニスト、デューク・ジョーダンが書いたもので、メロディの良さやアドリブに向けたコード進行を併せ持つ好曲です。ライブ盤の音源です。

<https://www.youtube.com/watch?v=mECjk17Sat8>

ハードバップ期に活躍しオリジナル曲も書いたギタリストのウェス・モンゴメリーも忘れるわけには行きません。ウェスが残したレコードではスタンダード曲も取り上げていて、有名なオクターブ奏法などアドリブも楽しめますが、個性的なオリジナルがより一層魅力を高めていると思います。フル・ハウスというオリジナル曲もよく知られていますが、

ここではフォー・オン・シックス (Four On Six) という曲のライブ音源を聴いてください

。  
<https://www.youtube.com/watch?v=zxTD1XQTcyk>

こういう曲を聴くと、やはりミュージカルのために書かれた曲とは明らかに違う、ジャズミュージシャンの作ならではの魅力を感じます。例えば、この音源で25から35秒あたりでウェスが弾くコードカッティングの譜割りのジャズ的な気持ちよさはジャズチューンならではのです。

今回はここまでにします。ハードバップ期のジャズチューンといえば、名曲をたくさん書いたあの人を取り上げないわけには行きませんが、そこにたどり着く前に結構なボリュームになってしまいました。その人の作品を中心に次号で解説しますので、少々お待ち下さい！